

## 2022青年・女性・家族中央総行動

2月26日(土)9:30より、新橋交通ビル地下会議室にて、2022青年・女性・家族中央総行動が開催されました。昨年同様、コロナ禍ということで、リモート中心での開催となりましたが、九州の青年部、福崎彰(九州本部)、香田賢晋(博多地区本部)の2名は現地にて参加しました。本集会では、開会の挨拶の後、佐藤正知弁護士(横浜法律事務所)による労働講座が開催され、「春闘の歴史」について講演していただきました。その後、長瀬嘉宏神奈川地区本部執行委員長による「国労神奈川地区本部青年部結成に向けた取り組み」についての特別報告がありました。最後は、木村浩希青年部長(東京地方本部) <写真左>による決意表明の後、「団結ガンバロー」で閉会しました。その後、13:30からは、同会場にて、第104回青年部中央委員会が開催され、福崎(委員)、香田(傍聴)が引き続き参加しました。エリア報告では、福崎<写真右>が、コロナ禍におけるJR九州の異常な実態(ボーナス超低額回答、休憩所のテレビ撤去、博多駅ホーム主任廃止等)とそれに対する自身の見解について発言しました。



### 青年のひとりごと

「シャーデンフロイデ」という言葉があります。これは、ひとことで言うと、「他人の不幸は蜜の味」という人間の心理状態のことで、誰もが心当たりがあるのではないのでしょうか。何とも卑しい感情かと思われかもしれませんが、意外にもその根本にあるのは「正義感」だと言われています。というのは、私たち人間はかつて、災害や疫病、そして外敵から身を守りながら生活するため、集団で一致協力する義務がありました。この場合、一人でも「ズル」をして怠ける者がいれば、そのコミュニティ全体が存続の危機に晒されるため、他の成員による制裁行為(サンクション)が大いに賞賛されます。そして、このときの「してやった感」こそが、主観的幸福度を高めていたのは容易に想像出来ます。しかし、文明が発達した現代において、人々は常に「集団」を維持しなくても、十分に生活していくことが出来ます。にもかかわらず、他人を裁きたがる人間のあまりに多いこと。これは、特に日本においては、その文化的背景を考えると良く分かります。私たちは子供の頃から、「和」を重んじることを何より優先すべきといった教育を受けて育ちます。しかも、それは一人一人の「自主性」を尊重するものではなく、「みんなが同じ」であることを前提とする「強制的」なもの。これは、大昔の成功体験を引きずっているのか、時代錯誤とも言えるのですが、このとき、「自分」を捨てて周囲に迎合している者が、「自己」を主張しながら行動している者を見て、「許せない」といった感情を抱いても不思議ではありません。こうした心理こそが、他人の足を引っ張り「満足感」を覚える「いじめ」の元凶でもあります。「みんなで頑張ろう」とは一見心地よく聞こえますが、果たして、その「みんな」でしていることは社会通念上不可欠なものと言えるのか。結果として、本当に「みんな」のことを考えて行動している者を貶めてはいないか。生活水準の高さに反して、「日本人は幸福度が低い」と世界的に思われているのも、こうした議論が欠けているからなのかもしれません。

### ○当面する行動

- 3月12日(土) 15:00~/被災11周年さようなら原発県集会 中小企業振興センター
- 3月13日(日) 14:00~/3・13福岡県総がかり行動 警固公園
- 3月14日(月) 18:30~/筑紫平和センター役員会 筑紫教育会館